8月-9月

(1)

日光より　二伯

雷雨

近松秋江

七月の三十日から日光に来てゐます。今日（八月四日）で、もう、来てから五日となるもの、毎日の雷雨は少々閉口です。

三十日の夕方の雷雨は、東京で長い間酷暑に悩んだ後ふりで、却って驟雨一過の涼味を覚でたくらゐでしたが、その翌八月の一日も同じやうな雷雨。雷雨は三日目となるかと、もう一日は覚悟してゐたところ、果して夜って来た。しかも凄い雷鳴で、町の方に二ケ所ほど落雷した。もう、これで三日ついたから翌日からは晴れるだらうと思ってゐると、三日の日は、しかも午前から、轟きわたって、三時頃となるもの鳴りづめ、だうとう近い所の東照宮山内の老杉に落雨して、みごとに無惨な痕跡を生々しく残してゐる。これで四日ついた。

今日（四日）は、もう、あらまいと思ってゐると、午後から又

まさか

でゴロ〳〵と遠鳴りがし

て来た。今日もまたかと思ってわっと、日光の照ってわる碧空にがら〳〵がら〳〵と来た。もうこうんざりしてしまった。

その かはりに、東京は連日の炎暑といって わるのに、こゝは、そのとほりの雷雨で、二三時にして一過した後は、夜ルか、袷衣がほしいくらゐの冷涼を覚える。いくらか光でも、こんな五月つゞく雷雨はめづらしいといってわるが、みゝいくらか光でも、八月の初旬に、朝夕こんな涼味をすぼえることもすれてある。神橋の上ふんか、全く涼しさを通り越して寒いいくらゐである。

蔬菜

私は軽井澤にいったことがないが、夏の避暑地としては、まだ日光を愛する。滝があったり、古祠があったり、湖水があり、温泉があったりして、遊覧と散歩に單調をふくつてよい。それは、いわまでもないが、それよりも、日光の野菜の美味ふ、田園の風趣をほはふにおい。大根でも、東京の郊外にみてさへ、代でも、東京の郊外にみてさへ

味はい小さい美味である。毎朝、いくらでも、畑から、すぎ立てのものを籠で背負ったり、馬に載せて賣りに来る。大根には、まだ、ちょっと早いが、今に秋大根の早いの丈夫に成ると、それを味噌汁の實にすると、何とゆいへない味である。

冬の日は、思ふたに、おそまきしいが夏の日は、私にとっては、嬉しの里である。わづかに一二ケ月の生活であるが、そこに若々しかい人間生活の慰安と

無限の懷ろみがある。朝冷の膳に向ふと、暖かい大根の實の味噌汁香がする。生活の安寧を賞えしめるのである。